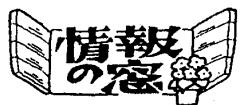


創立 50 周年記念式典・講演会ルポ



三和 雅史 (財鉄道総合技術研究所), 筒井 美樹 (財電力中央研究所)

1. はじめに

日本オペレーションズ・リサーチ学会創立 50 周年記念式典・講演会が去る 9 月 26 日に政策研究大学院大学想海樓ホールで開催された。本式典等は海外のオペレーションズ・リサーチ学会の関係者その他、関係学会や経済界、学術界、政界から多数の来賓や講演者が出席して「記念式典、講演会、祝賀パーティ」の 3 部構成により行われ、各々への参加者は 141 名、206 名、113 名に上り、大変な活況であった。以下にその模様をレポートする。

2. 創立 50 周年記念式典（第 I 部）

司会担当の川島副会長の開会挨拶に続いて青木会長による以下のような挨拶があった。

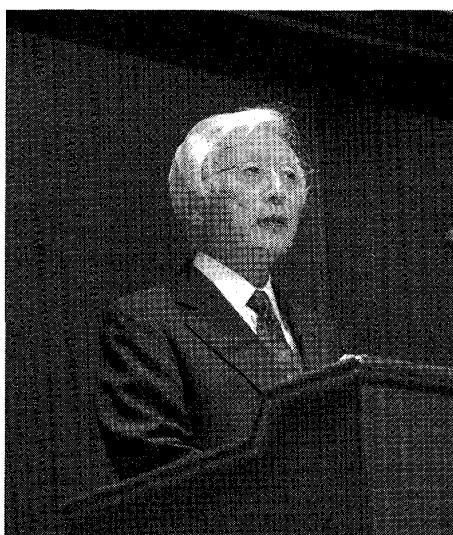
「日本オペレーションズ・リサーチ学会（OR 学会）は 1957 年に設立されて以来、様々な問題解決のための方法を提案し、産業や社会全般に大きく貢献してきた。これは、先輩や現役を含む多くの会員の努力によるものであり、このことに大変感謝している。学会設立以来 50 年の間、我々は社会貢献や国際貢献、特にアジアとの連携について積極的に取り組み、また学会

員の満足度の向上に努めてきた。これから 50 年は、OR の新展開の時代として他分野との融合等によりさらなる発展を目指すときである。このためには、各会員の努力、学会への積極的な参画が重要である。学会、そして会員が今後一層活躍することを期待している」

次に、海外からの来賓 Dr. Elise del Rosario (IFORS 会長)、Dr. Brenda Dietrich (INFORMS 会長)、Prof. Xiang-Sun Zhang (ORSC 前会長)、Prof. Sung Joo Park (KORMS 前会長) が本式典の実行委員長である大山副会長により紹介された後、Rosario 会長から祝辞があった。

祝辞は「こんにちは」の日本語で始まり、最初に OR 学会が IFORS に対して大きく貢献してきたことに対するお礼が述べられた後、OR 学会と IFORS の関係の歴史がスライドにより振り返られた。そして、これから OR 学会には、特にアジア地域での OR の発展、若手研究者を対象とした奨学金制度の充実に重要な役割を果たすことを期待すると述べられ、最後に「どうもありがとう」の言葉で祝辞を締められた。

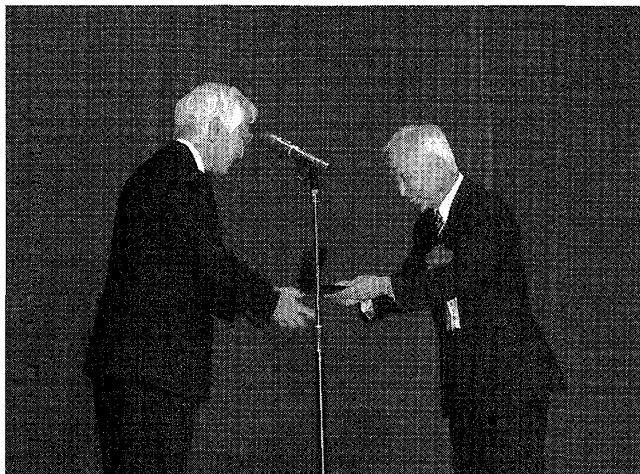
この後、大山副会長により中国 OR 学会の Yaxiang Yuan 会長、米国メリーランド大学の Gass 名誉教授、米国テキサス大学の Cooper 教授、インド OR 学会の Mukherjee 前会長からのお祝いのメッセージが紹介された。



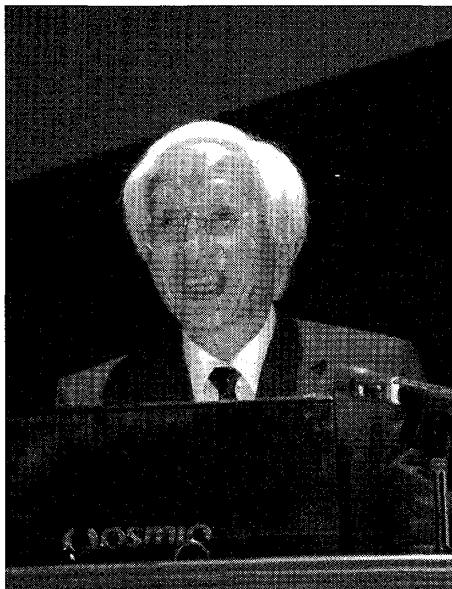
青木会長による式典開会挨拶



IFORS 会長 Rosario 氏による祝辞



近藤賞授賞式（右が受賞者の茨木先生）



（株）東芝 岡村会長

最後に、創立 50 周年を記念して設立された近藤賞の授賞式と受賞記念講演が行われた。

まず、近藤次郎東大名誉教授を壇上にお迎えした後、近藤賞設立の経緯が今野前会長により次のように説明された。

「OR 学会が次の 50 年においても発展することを担保するために、また OR は役に立たないという人達にその素晴らしいをアピールするために OR 学会最高の賞を設立した。賞の名称には 2002 年に文化勲章を受章された近藤先生のお名前を冠した。将来、OR の周辺分野も取り込んだ大きな賞として育てていきたい」

そして、歴代の会長で構成した選考委員会で検討した結果、離散最適化問題の理論やメタヒューリスティック解法の提案、その産業界への応用等の多くの業績を残されたこと、数多くの質の高い学術論文を発表されたこと、後継者の育成に尽力されたこと、また国際的にも広く活動して多くの功績を挙げておられることを高く評価し、茨木俊秀先生（京都大学名誉教授、現関西学院大学教授）を第 1 回受賞者として選出したことが発表された。

この後、青木会長から茨木先生に賞状と記念のメダル、副賞の目録が贈られ、会場は大きな拍手に包まれた。

引き続き、茨木先生による受賞記念講演が行われた。講演題目は「汎用ソルバによる問題解決に向けて」であった。講演では、離散最適化問題を解くことがいかに困難であるかの理論的な説明、その解決の方法としての標準問題の分類とメタヒューリスティックによる求解法等の成果を PC 上でのデモンストレーションを交えて講演された。

3. 記念講演会（第 II 部）

第 II 部の講演は、（株）東芝 取締役会長の岡村正氏、（株）パソナ 代表取締役グループ代表兼社長の南部靖之氏、政策研究大学院大学教授で前日本学術会議会長の黒川清氏、民主党幹事長の鳩山由紀夫氏の 4 氏によるものであった。

（株）東芝の岡村会長の講演題目は「イノベーションを創出する企業経営」で、次のような講演がなされた。

「ものの豊かさを実現する時代であった 20 世紀においては、生産コストの削減、製造プロセスの効率化、経営判断の洗練が進む中、品質向上、大規模化そして複雑化する課題の解決に OR は大きく貢献した。21 世紀を迎え、心の豊かさを実現する時代に変化する中、IT 関連分野への OR の適用事例が増加しており、企業における OR は時代と共に変化してきた。

近年、東芝では経営改革の一環として MI（マネジメント・イノベーション）を実践してきた。シックスシグマの考え方を導入し、企業活動プロセスの課題や欠陥をデータに基づいて把握し、最重要課題の選定と目標設定による実効的な課題解決策の検討、実行により、業績を回復させることができた。

さらなるイノベーションを実現するためには、企業を取り巻く環境が国際化、情報化、心の豊かさの追求へと変化していることを理解した上で活動することが重要である。OR への期待は、まさにここにある。『国際化』においては、特に、地球環境、希少資源問

題に対応し、持続可能な世界を実現するためのORが必要である。『情報化』においては、リスクを考慮した最適化手法の開発やロバストなシステムの構築が必要である。『心の豊かさの追求』においては、人間系を含むシステムの効率化が求められる。今後はORの枠にとらわれることなく、情報科学や社会科学と協調し、トータルの系として効率化することを考えてももらいたい」

（株）パソナの南部社長の講演題目は「企業価値を高める人材活用」で、自身の経験を交えて次のような講演がなされた。

「パソナの起業は32年前（22歳）のときだった。大学の卒業を控え、就職活動中だった自分は、働くこととは企業に就職して1人前になって自立することだと考えていた。しかし、父に『働くこととは自分を皆に知ってもらうこと』だと教えられ、働くこととは対価を受け取ることではなく個性を周囲に分かってもらうことだと気づき、就職活動をやめた。そして、当時最も就職が困難だった子育てを終えた女性が働く仕組みを作るための会社を作った。会社を設立した当初の夢は『世のため、人のため』であっても、やがて『売上高を増やす。株式を上場する』といった欲望へと変化する危険がある。企業とは利益追求と社会貢献の両輪があってこそ前進していくものであり、企業価値を高めるためには何が大切な判断を間違えてはならない。

昨今の企業の不祥事は、『身なり、ふるまい、動作、



（株）パソナ 南部グループ代表

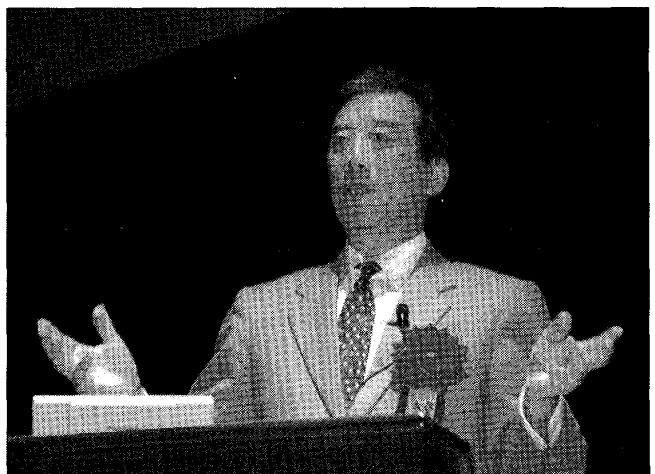
態度は大切である』ということ、『人にできるだけの愛情を注ぐ』ということ、『原点に戻る』ということを教えてくれた。国、企業、個人が『こういう社会を作りたい』という明確なビジョンをもち、知恵を出し、努力すれば、夢を実現することができる。企業の価値とはその企業がもつ夢、希望、目標である。そして、それがなくなつたとき、その会社は倒産する。国の価値は文化にあり、そこでは企業も人も文化である」

政策研究大学院大学教授で前日本学術会議会長の黒川氏の講演題目は「イノベーション」で、次のような講演がなされた。

「イノベーションは単なる技術革新ではなく、保守的になったコミュニティを変えるために必要である。我が国では高齢化社会が進む一方、地球的には気候変動や環境問題、食料や資源の問題、南北格差の問題、人口問題等がある。またアジアの急激な経済成長もあり、種々の問題がグローバル化する中で持続可能な社会を構築するためにはイノベーションが必要である。

策定した『イノベーション25』では、2025年までの長期的な計画を提案し、我が国が何をすべきかを示した。ここには、イノベーションを起こすための本質である社会、人材、政策イノベーションが含まれる。これらがまとめて起きないと本当のイノベーションにはならない。

イノベーションを起こすためには、我々の考え方と行動を変えることが重要である。社会制度も変革されなくてはならない。つまり、社会イノベーションである。これを実現するためには、政策と人のイノベーションが必要である。



政策研究大学院大学 黒川教授

政策イノベーションでは、我が国のクリーンエネルギー技術は世界的に大変進んでいることから、これを成長の中心に据えるべきである。環境、エネルギー、低炭素社会の問題は世界的に関心が高く大きな課題であり、日本は国際社会でリーダーシップを發揮すべきである。

人材の育成については、若い人同士の交流を進めることや、教育により多様性を実感してもらうことが必要である。そして、大学院の国際化を進める必要がある。最早、理系や文系などという区分は必要ない。従来の組織やタテ社会の枠組みからは出てこない、起業家精神あふれる人たちが数多く出現し、国境を越えて活躍する社会や環境を整備、構築する必要がある。

イノベーションを進めるためには国、企業、個人のグローバル化が進むことが重要である。企業においては、多種多様な人材がいる会社、変化に対応できる会社となる必要がある。ダイナミックな考え方と経営ができなくてはならない。1人のアイデアが世界を変える時代である。ヒューマンリソースからヒューマンキャピタルへの変化のときである。Think locally, act globallyの考え方方が重要である。

このようなイノベーションを推進するためには、イノベーションを起こしやすい環境や仕組みを整備する必要がある。あらゆるタテの壁や既得権等を取り払い、柔軟かつ積極的に革新を続けることがイノベーションの本質である。イノベーションといつても行動しなくてはただのお題目である」

民主党の鳩山氏の講演題目は「政治を科学するのか、科学を政治するのか」で、次のような講演がなされた。



民主党 鳩山幹事長

「30年程前にアメリカの西海岸に留学していたことがある。アメリカの建国200年祭のとき、現地でアメリカ人の姿を見て、彼らはアメリカ人であることを大変誇りに思っていることに感心した。果たして、日本人は日本人であることに誇りをもっているだろうか…そう考えたとき、政界に入って日本のためになるような仕事をしたいと思ったのが、現在の自分のスタート点である。

当時、私は科学技術が進歩すると世の中がよくなると思っていた。そこで、政界に入るときのキャッチフレーズを「夢を形に、今、政治を科学する」とした。そして、政界に入ってどうだったか？

本来、政治は最高の意志決定をすべきところであり、そのためには最高の科学を駆使して最高の結論を出す必要がある。しかし、政治と科学は乖離しているというのが実態ではないだろうか。国民のために一番よい結論を出すべきはずが、決定者本人のためになる結論を出している…これが現実である。

例として次のような問題を考えてもらいたい。本州と四国の間に10本の橋をかけるプロジェクトがあったとし、1本の橋をかけるのに100億円必要だとする。年間100億円の建設予算があったとして、どう配分するのが最適だろうか？まず、100億円かけて橋を1本作れば、すぐに供用できる。1年に1本ずつ作って供用し、10年かけて10本の橋ができるプロジェクトは完結する。この間、1本の橋ができるごとに利便性が拡大していく。これが正しい結論だと思う。しかし、政治では10本の橋の1本1本に10億円/年ずつの予算を配分するというのが結論である。

このように、当たり前のことを適切に決定できないのが現実の政治の姿である。つまり、政治は国民のためにならない選択をしている。

では、なぜ政治を科学するのが難しいのか？縦割り行政による様々な壁の存在が1つの理由である。例えば、予算は省庁ごとに決められているため、本来必要なところへ省庁の枠を超えて再配分することができない。政治と行政が密接に絡んでいる限り、最適な意志決定はできないことを認識し、我々はこうした問題を改善する仕組みを作らなくてはならない。政治はなぜハズレ値が生まれたかを分析し、その解決策を考えるべきである。しかし、これまでの政治は平均値を上げるために主眼をおいてきた。この4年間の所得者層の分布の推移をみると、低所得者層の割合が増加した一方で高所得者層の割合も増えた。つまり、平

均値付近の所得者層が減って両極端の層が増加してしまった。これは、平均値を上げればよいという錯覚に陥ったために行き着いた結果である。

現在の政治、行政は長期的な視野で政策を考えることができない状態にある。環境問題の解決、あるいは国と地方のあり方を議論するにはそうした観点が必要である。こうした問題を研究の対象とし、政治家を刺激するような論文がOR学会から発表されることに期待したい。学問で重要な議論をいかに政治に結びつけるかということも考えてもらいたい。OR学会と政治が連携できれば、大変喜ばしいことだと思う」

4. 祝賀パーティ

祝賀パーティは、特別講演会終了後、大学内の会場で催された。

青木会長による開会の挨拶、民主党の鳩山幹事長と政策研究大学院大学の八田学長から挨拶があった後、近藤次郎先生による乾杯がなされた。近藤先生は、「この50年は夢のように過ぎ去ったが、学会員になったときと変わらない情熱を今ももち続けている。今後はORの利用範囲のすべての分野に会員が存在し、つながりを横に広げていくことも重要である。ついては、これから約5年で会員数を倍にすることにご賛同の皆様と一緒に杯をあげたい」と述べられ、杯をあげられた。

パーティの途中では、OR学会創立50周年記念事業として作成された「OR事典」と「ORアーカイブス」について、逆瀬川監事の挨拶の後、矢島理事と生



近藤先生による乾杯

田目編集委員からPCによるデモンストレーションを交えて紹介された。

最後に、大山副会長による締めの挨拶があり、翌日からの研究発表会が無事に終わること、また六本木の夜は危険なので注意して帰るようにと述べられ、楽しい雰囲気の中、お開きとなった。

以上のように、3部とも大変な盛り上がりの中で、無事に終えることができた。運営にご協力下さった関係の方々、また参加下さった皆様に心より感謝申し上げたい。